

鈴木主水 白糸口説き

花のお江戸の その傍らに
しても珍し 心中話し

ここは四谷の 新宿町に
紺の暖簾(のれん)にや 桔梗(ききょう)の紋よ

ここに名高き 橋本屋とて
数多(あまた)女郎衆の あるその中で

御職(おしよく)女郎の 白糸(しらいと)こそは
歳は十九で 当世育ち

愛嬌(あいきょう)よければ 皆々様が
我も我もと 名指して上る

分けてお客さんは どなたと問えば
春は花咲く 青山(へんどう)

鈴木主水(すずきもんど)と 云う侍よ
女房持ちにて 二人の子供

二人子供の そのある中に
日にち毎日 姫買(いばかり)

見るに見かねた 女房のお安
わしが邪険で 言うのじゃないが

二人子供は だてには持たぬ
やめてくだんせ 女郎買(いばかり)

金のなる木は 持ち合わせまい
言えば主水は 腹立ちまぎれ

何を小癩(こしゃく)な 女房の意見
己(おの)が心で 止まないものが

女房だてらの 意見じゃ止まぬ
愚痴のそちより 女郎衆が可愛い

それが嫌なら 子供を連れて
そちのお里へ 出て行かしゃんせ

言うて主水は 我家を後に
出でて行くのが 女郎買い姿

あとでお安は 聞く悔しさよ
如何(いか)に男は 我ままじゃとて

死んで見せよと 覚悟はすれど
五ツ三ツの 子に引かされて

死ぬにや死なれず 歎いておれば
五ツなる子が そばへとよりて

これ母さん 何故泣かしゃんす
気色(きしよく)悪けりや お薬あがれ

どこぞ痛くば さすつてあげよ
坊が泣きます 乳くだしゃんせ

言えばお安は 顔ふりあげて
何処も痛くて 泣くのじゃないが

幼けれども よくきけ坊や
あまり父様 身持(みもち)が悪い

意見いたせば 小癩(こしゃく)な奴と
髻(たぶさ)搦んで 打擲(ちようちやく)なさる

さても残念 夫の心
自害しよう と 覚悟はすれど

後に残りし 我子が不憫(ふびん)
どうせ女房の 意見じゃ止まぬ

さればこれから 新宿町の
女郎衆に頼んで 意見をしよう と

三ツなる子を 背中に背負い
五ツなる子の 手を引きまして

出て行くのが さも哀れなる
行くは程なく 新宿町よ

紺の暖簾(のれん)は 橋本屋とて
見れば表に 主水の草履(ぞうり)

それと見るより 小職(こしやく)を招き
私しやこちらの 白糸さんに

どうぞ会いたい 会わしておくれ
アイと小職(こしやく)は 二階へ上がり

コレ姉さん 白糸さんよ
どこの女中か 知らない方が

何かお前に 用ありそうな
会ってやらんせ 白糸さんよ

言えば白糸 下へと降りる
お前さんかえ 何用でござる

言えばお安は 初めて会うて
私しや鈴木 主水が女房

お前みかねて 頼みがござる
主水身分は 務め(つとめ)の身分

日々の務めを 怠るならば
末はお扶持(ふち)も はなるる程に

ここの道理を よく聞き分けて
どうぞ我が夫(わがつま) 主水殿に

意見なさりて 下さりませと
せめて此の子が 十(とお)にもなれば

昼夜揚詰め(あげづめ) なさりよとままよ
又は私が 去られた後で

お前女房に なんすとても
どうぞ其時 迄(まで)来たならば

三度来たなら 一度は揚(あげ)て
二度めは意見 して下しやんせ

言えば白糸 言葉に詰まり
私は務めの 身の上ならば

女房持ちとは 夢にも知らず
さぞや憎かる お腹が立とう

私もこれから 主水様に
意見しましょう お帰りなされ

言うて白糸 二階へ上がる
後で二人の 子供を連れて

お安我家へ 早(はや)帰りける
ついに白糸 主水に向い

お前女房が 子供を連れて
私に頼みに 来ました程に

今日はお帰り 泊(とめ)てはすまぬ
言えば主水は にこつと笑い

置いておくれよ 久しいものじゃ
ついにその日は 居続けなざる

待てど暮せど 帰りもしない
お安子供を 相手にいたし

最早(もはや)その日は 早(はや)明けければ
支配方より お使いありて

主水身持が 不埒(ふらち)な故に
扶持(ふち)も何にも 召し上げられる

後でお安は 途方に暮れて
後に残りし 子供が不憫(ふびん)

思案しかねて 当惑いたし
扶持(ふち)に離れて 永らえおりて

馬鹿なたわけと 言われるよりも
武士の女房じゃ 自害をしようと

二人子供を 寝かしておいて
硯(すずり)取り出し 墨すり流し

おつる涙が 硯(すずり)の水よ
涙止めて 書き置き致し

白き木綿で 我が身を巻いて
二人子供の 寝たのを見れば

可愛い可愛いで 子に引かされて
思い切り刃を 逆手に持ちて

グツと自害の 刃(やいば)の下に
二人子供は 早目がさめて

三ツなる子は 乳にと縫(すが)り
五ツなる子は 背中に縫(すが)り

コレ母さん ノウ母さんと
幼心で 只泣くばかり

主水それとは 夢にも知らず
女郎屋立ち出で ほろほろ酔で

女房じらしの 小唄で帰り
表口より 今戻ったと

子供二人は 駆け出しながら
モーシ父様 お帰りなるか

何故か母さん 今日に限り
物も言はずに 一日送る

ホンに今まで いたずらしたが
御意はそむかぬ ノウ父様よ

どうぞ詫びして 下されましと
きいて主水は 驚きいりて

合の唐紙 さらりと開けて
見ればお安は 血汐(ちしお)に染まり

わしが心の 悪いが故に
自害したかよ 不憫(ふびん)なことよ

涙ながらに 二人の子供
膝に抱き上げ 可愛や程に

言えば子供は 遺骸にすがり
モーシ母さん なぜ死にました

私二人は どうしましようと
歎く子供を 振り捨ておいて

旦那寺へと 急いで行きて
戒名もらい 我家に帰り

哀れなるかや 女房の遺骸
菰(こも)に包んで 背中に負うて

三ツになる子を 前にと抱え
五ツなる子を 手を引きながら

行けばお寺で 葬りまする
是非もなくなく 我家に帰り

女房お安の 書き置き見れば
余り務めの 放楽(ほうらく)故に

扶持(ふち)も何も 取り上げられる
又は門前 払いと読みて

さても主水も 仰天いたし
子供泣くのを そのまま置いて

急ぎ行くのは 白糸方へ
さてはお出でか 主水様よ

したが今宵は お帰りなされ
言えば主水は 其の物語り

襟にかけたる 戒名出して
見せりや白糸 手に取り上げて

わしが心の 悪いが故に
お安さんにも 自害をさせて

さればこれから 三途の川も
お安さんこそ 手を曳きましよと

言えば主水を しばしと止めて
わしとお前と 心中しては

お安様への 言い訳たため
お前死なずに 永らえしやんせ

二人子供を 成人させて
回向(えこう)頼むよ 主水様よ

言うて白糸 一間(ひとま)へ入りて
数多(あまた)朋輩(ほうはい) 女郎衆を招き

譲り物とて 簪(かんざし)やれば
これを小春は 不思議に思い

これは姉さん どうした訳よ
今日に限りて 譲りを出して

それにお顔も すぐれもしない
言えば白糸 よく聞け小春

わしは幼き 七ツの年に
人に売られて 今この廓(くるわ)

辛いつとめも 早十二年
つとめましたよ 主水様に

日頃年頃 懇親したが
今度儂(わし)ゆえ お扶持(ふち)も離れ

又は女房も 自害をなさる
それに私が 生成(いきなり)おれば

お職女郎の 意気地(いきじ)がたたぬ
死んで意気地(いきじ)を 立てねばならぬ

早く其方(そなた)も 身軽になりて
わしがためにと 香花を頼む

言うて白糸 一間へ入り
口の内にて 只一言は

涙ながらに ノウお安さん
私故にと 命を捨てて

さぞやお前は 無念であろう
死出の山路も 三途の川も

共に私が 手を曳ましよと
南無という声 此世の別れ

数多(あまた)朋輩(ほうはい) 皆立ち寄りて
人に情けの 白糸さんが

主水さん故 命を捨てて
残り惜しげに 朋輩(ほうはい)たちが

別れ惜しみて 歎くも道理
今は主水も 詮方(せんかた)なさに

忍びひそかに 我家へ帰り
子供二人に 遺(ゆずり)を置いて

すぐに其のまま 一間へ入りて
重ね重ねの 身の誤りに

我と我が身の 一生捨つる
子供二人は 取り残されて

西も東も わきまえ知らぬ
幼心に 哀れなものと

数多(あまた)心中 あるとは云えど
義理を立てたり 意気地(いきじ)を立てて

心合(あ)うたる 三人共よ
聞(き)くも哀(あ)れな 話(わ)でござる

御職女郎(おしよくじよろう) Ⅱ

その娼家の中で最上位の遊女。
または、最も売れっ子の遊女のこと。

小職(こしよく)

娼家で使う女兒。 禿(かむろ)